



再生の設計図：富岡町の「協働」 が導く奇跡の軌跡（2014-2018）

異なる道、一つの目標。全町避難から「第3の道」
への挑戦と復興のドキュメンタリー。

全町避難4年目： 13,500人の「離散」と「焦燥」

- ・2014年春、富岡町民約13,500人は全国47都道府県での避難生活を強いられていた。
- ・除染やインフラ復旧は遅々として進まず、荒廃する家屋。
- ・避難生活の長期化に伴い、町民の中に広がる「見えない未来」への焦りと、国や行政に対する怒り。

「改めてこの長い避難生活の中で、様々なご苦勞をされている町民の皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。
……町民は帰還できるようになるまで避難先に滞在し、故郷の復興・復旧にも関わりながら安心して生活できるよう法制度や施策を見直す必要があります。」

—— 宮本皓一 町長（2014年就任直後の挨拶より）

一筋の光、そして復興のメタファー：異なるスタイル、同じ頂点

2014年夏、全町避難の中で富岡高校バドミントン部が全国制覇。
彼らのラケットグリップへの「こだわり」は、富岡町の復興哲学の象徴となった。



渡辺勇大 (Yuta Watanabe)

- スタイル：シンプル主義（アンダーラップ＋ウェットテープのみ）
- こだわり：道具にこだわらず、自身の「プレー」で魅せる。



三橋健也 (Kenya Mitsuhashi)

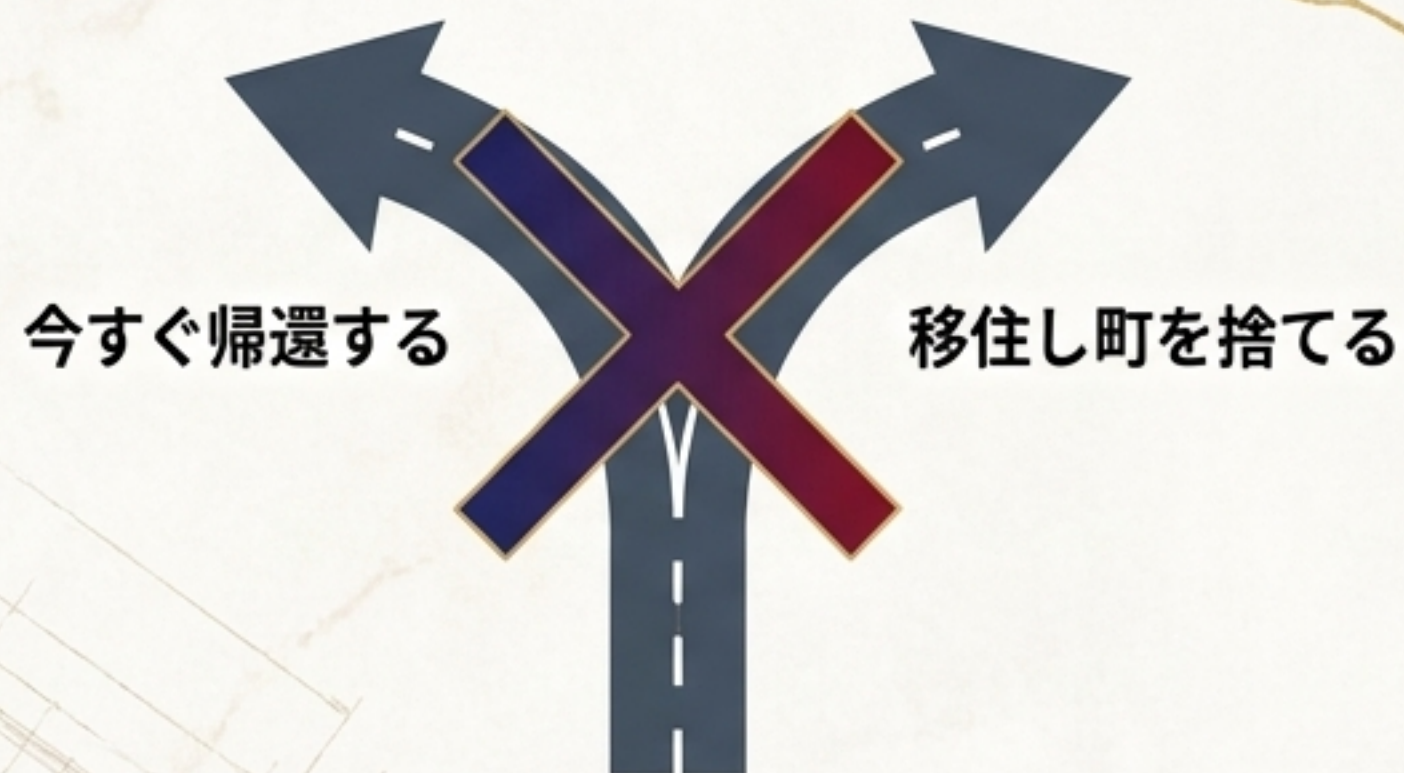
- スタイル：カスタマイズ主義（イエローのタオグリップ、太めのエンド）
- こだわり：シングルスとダブルスで巻き方を変える徹底した微調整。

【一つの目標、多様な道】

正反対のグリップスタイルを持つ二人が、完璧なコンビネーションで全国の頂点に立った。この事実は、散り散りになった町民に対して「どのような避難・生活のスタイルを選んでも、富岡町の誇りという一つのゴールは共有できる」という強いメッセージを与えた。

二者択一の拒絶：第3の道「長期退避・将来帰還」

Before



- 帰還か移住かを迫る国の政策は、地域と住民の「分断」を生む。
- 町民の実態・声（町政懇談会等）から確信した新たな選択肢の必要性。
- 【第3の道】：「長期退避・将来帰還」—— 帰還できる環境が整うまで避難先に留まり、故郷の復旧に関わりながら安心して生活する選択。

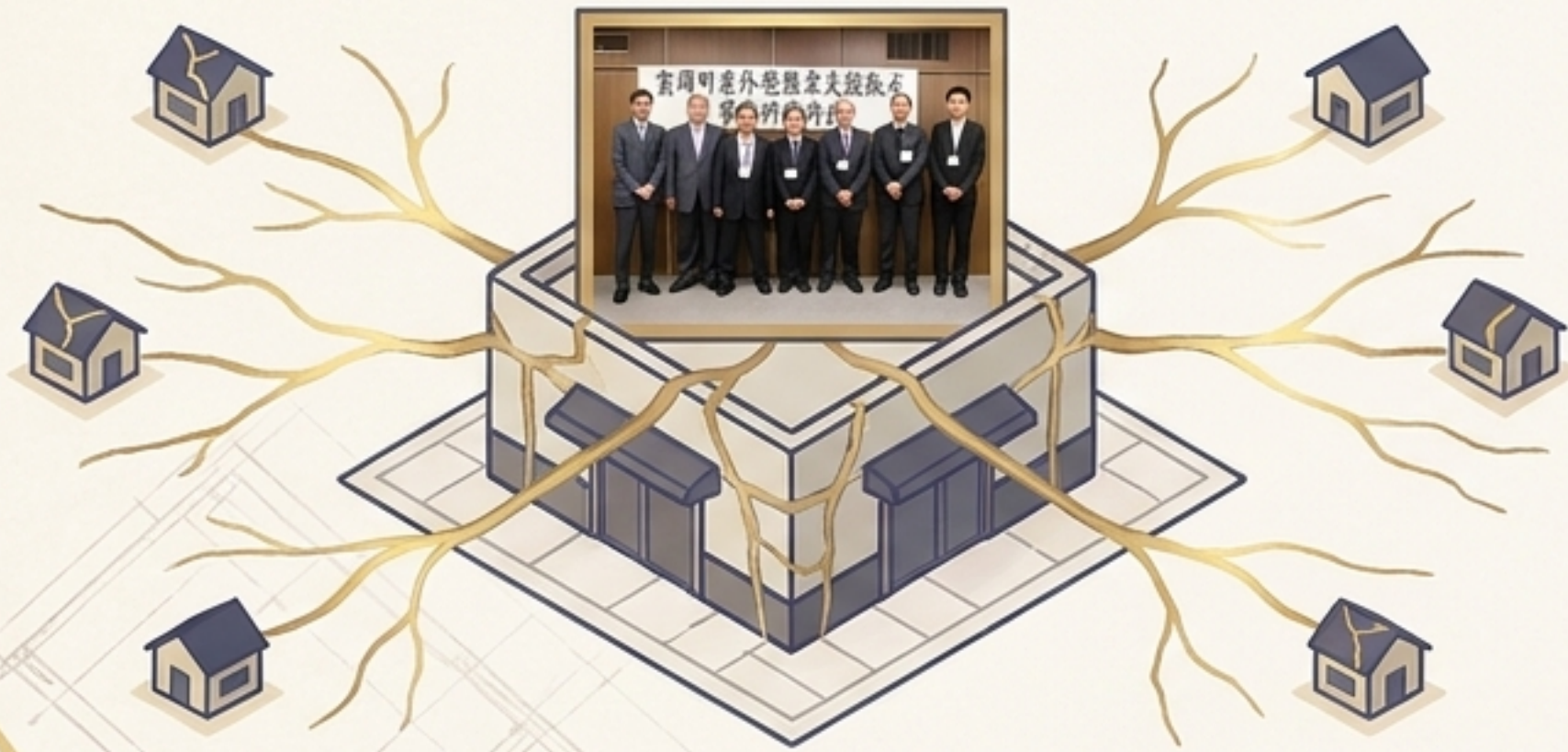
第3の道：長期退避・将来帰還



決断を強制せず、住民それぞれの「今のスタイル」を許容することが、コミュニティの魂を守る唯一の方法だった。

離散した心を繋ぎ直す：県外避難者支援拠点の開設

行政への「怒り」の裏にある「頼みは役場しかない」という真情に耳を傾ける。



1. 拠点の設置（2015年1月）：
埼玉県さいたま市に支援拠点を開設し、
4名の支援員を配置。

2. 対話と傾聴
3人1組で全国の避難者宅を戸別訪問。
「遅い」と叱責されることもあれば、
「よく来てくれた」と歓迎されることも。

3. 絆の再構築
お茶会、屋形船イベント、ふるさとバスの
運行を通じ、孤立化を防ぎ、失われか
けた信頼を結び直す。

「まず、上がってお茶でも飲んでいがっせ」
——終わりのない傾聴が、制度と住民の間の冷たい溝を埋めていった。

魂の救出作戦：解体される家屋と記憶のレスキュー

- ・解体基準の緩和により、雨漏りや動物被害で荒廃した家屋の取り壊しが急加速。
- ・放棄されれば、古文書や生活用具、町の歴史の証拠がすべて瓦礫として消滅する危機。



歴史・文化等保存
プロジェクトチーム

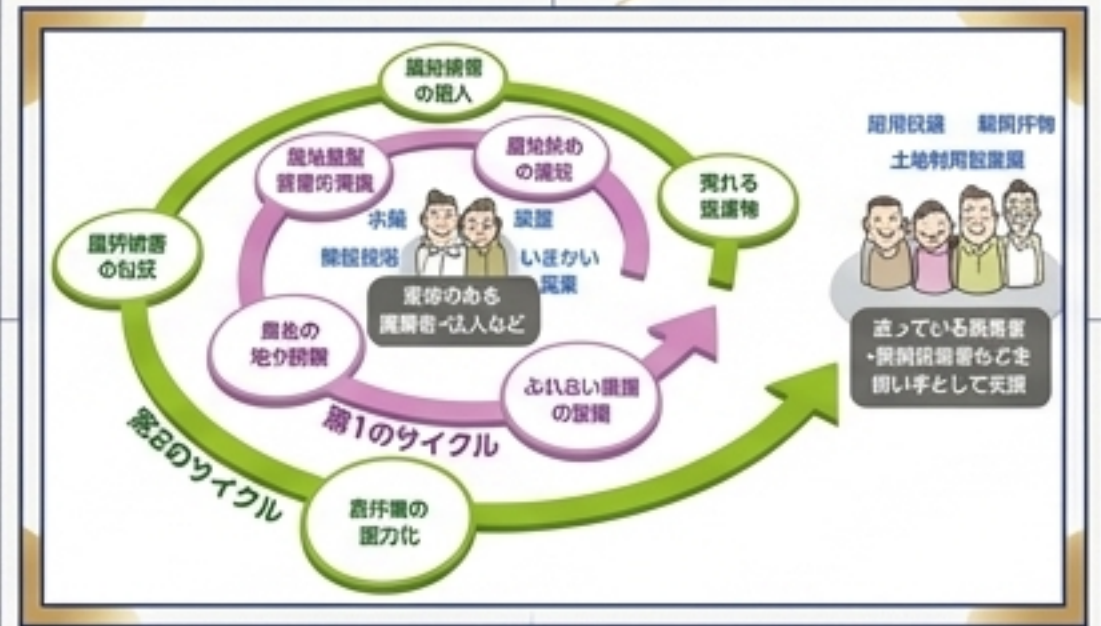
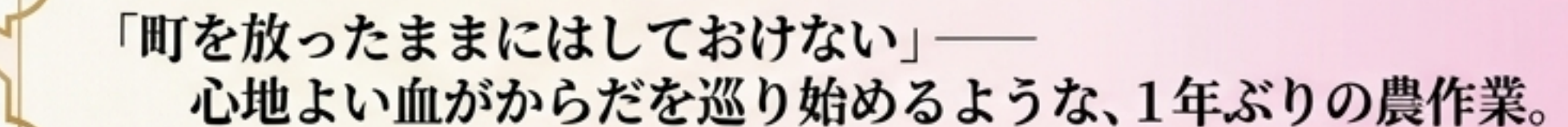


町職員有志と「ふくしま歴史資料保存ネットワーク」（福島大学・阿部浩一教授ら）による協働。

- ・目的：単なる古文書だけでなく、昭和・平成の営みを示す帳簿、手紙、写真など「富岡のなりたちと誇り」を救出。
- ・成果：住民がいなくなった地域の歴史を繋ぎ止め、町民のアイデンティティの柱となる。

先祖代々の農地を荒廃から守るため、農業者たちが再結集。

先祖代々の農地を荒廃から守るため、農業者たちが再結集。



見えない敵との闘い：風評被害と「心の汚染」を破る

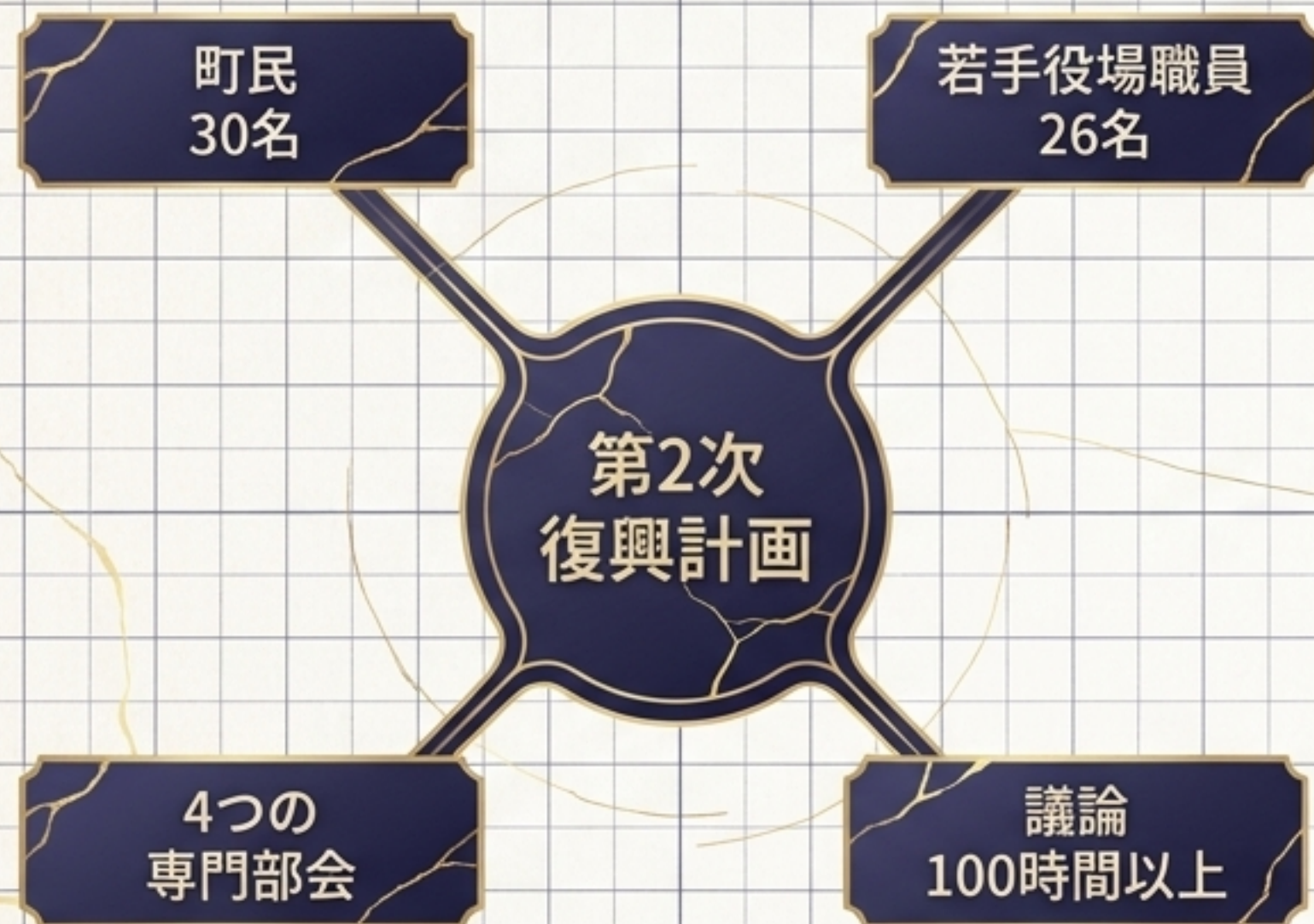
福島県独自の厳しい
全量全袋検査。
結果は「問題なし」。
しかし、科学的証明や
安全PRだけでは市場
の不信は拭えず、業務
用米として買い叩か
れる現実(実害)。



「安心・安全なものを作り
発信することに徹しよう」

- ・学生との交流：早稲田大学の学生など若い力を積極的に受け入れ、現場で交流。
- ・共創の力：理工学部学生による奇抜なアイデアや、150人分のレポートへの個別返信。
「若い人たちにこそ知ってもらい、広めてほしい」という切実な願い。

協働のエンジン：富岡町災害復興計画（第二次）



- ・構成：公募で選ばれた町民30名と若手役場職員26名、計56名が一堂に会する。
- ・議論：延べ100時間以上に及ぶワークショップ。「行政への怒り・無力感」を直視し、越えられない溝を埋める対話。
- ・結論：第一の願いは「ふるさと富岡との心のつながりの維持」。



<IMAGE 0>



<IMAGE_1>

「町民と行政が一体となって新しい富岡町を創造していく羅針盤…抱えてきた町民と行政の溝を埋める最後のチャンス。共に新しい未来の富岡町を見に行こうではありませんか」

—— 渡辺和則（検討委員会会長）

制度化されたエンパシー：「3つの道」支援フレームワーク

富岡町民としての誇りとつながり

帰還する

- ・帰還に向けた町内
インフラの復興・復旧
- ・地域産業の再生
(働く場の確保)
- ・帰還に関する生活・
健康支援

帰還しない

- ・移住先での町との
絆の維持
- ・町内の資産・
土地建物の管理支援
- ・継続的な情報発信と
健康管理

判断できない

- ・避難先での生活・
医療・教育支援
- ・将来の帰還に向けた
支援
- ・町との関わりの維持

どの道を選んでも「富岡町民」であり続けるための、
一人ひとりに寄り添う個別支援の具現化。

物理的再動：動脈の再開通と安心の土台作り



- 2014年9月: 国道6号（富岡—双葉間）の車両全面通行解除。浜通りの交通生命線が復活。
- 2015年1月: JR富岡駅の解体開始と再開通への整備。
- 2015年3月: 常磐自動車道（常磐富岡IC—浪江IC）全線開通。
- 治安維持の徹底: 町内44カ所に防犯カメラを設置・運用開始。消防団「とみおか守り隊」による巡回と安全確保。

単なるコンクリートの修復ではない。インフラの復旧と徹底した治安維持は、「帰還」という選択肢を現実のものにするための最低条件であった。

芽吹く希望：復興計画が物理的な「場」へ



1. さくらモールとみおか：複合商業施設の再開。「にぎわいづくり」の中心的拠点。



2. 医療と住居の再生：「町立とみおか診療所」の開設と、曲田地区における災害公営住宅の先行整備（50戸）。



3. 民業の復活：理容店など、暖簾の重みを受け継ぎ、避難先から帰還・再起する人々の姿。

「復興の先行きが不透明で不安な中、敢えて『絶対に復興させましょう！』と言いつづけた。生まれ変わった富岡町の姿こそが、諦めなければ必ず成果となることを証明している。」—— 渡部太一（経産省派遣職員）

結論：協働が描いた「真の復興」とは何か？

歴史

文化財の救出。瓦礫から拾い上げた「町のなりたちと記憶」が、未来のアイデンティティーの支柱となる。

大地

農業の復活。放射能と風評に抗い、先祖から受け継いだ土壌を「実証」と「交流」で取り戻す。

人

第3の道。帰る人、移住する人、迷う人。全員のスタイルを肯定し、傾聴することで結い直されたコミュニティの絆。

家を建て直すことだけが復興ではない。

それぞれの「異なる道」を尊重しながら、決して切れない「富岡」という一つの絆(グリップ)を握り続けること。

それこそが、富岡町が世界に示した「協働による魂の再生」である。